トルコ交流セミナーの意義と役割に関する研究
―渡航中止となったJATIS2014-15における学生の国際認識の変化に着目して―

市　川　　顕（産業研究所）
山　本　竜　大（金沢大学人間社会研究域法学系）
中　村　　圭（国際連携機構事務部）

要　旨

本稿の目的は、本学グローバル・スタディーズ科目であるトルコ交流セミナーについて、本学学生の「世界市民」化に関わる一連の事業の中で、その意義と課題を確認することである。2014年度のトルコ交流セミナーは、2015年２月初頭の「イスラーム国」による日本人人質殺害事件を受け、直前でのトルコ渡航の中止を余儀なくされた。急遽渡航が中止された状況の中で、担当教職員と参加学生有志は国内代替プログラムの実施を決定し、インターネットを通じたトルコ・コジャエリ大学の学生との交流、日本国内におけるトルコ的要素の発見のためのフィールド・ワークなどを通じて、異文化理解に努めた。本稿では第一に、このような事態にあって、トルコ交流セミナーがどのような意義を持ち得たのか、その課題とともに定性的に分析する。第二に、定量的分析手法を用いて、国内代替プログラムの効果を、とくに学生の国際認識の観点から分析する。そして、第三に、渡航中止による国内代替プログラムの実施という経験が学生に与えた影響について考察する。

1. はじめに

本稿は2015年２月８日から20日に、トルコ・コジャエリ大学と関西学院大学（以下本学）の学生各16名が参加して、トルコで開催される「予定」であったトルコ交流セミナー（Japan and Turkey Intercultural Seminar：以下JATIS）について、その意義と課題を明確化することを第一の目的とする。第二に、準備期間中およびセミナーの最終日に日本人参加学生からとったアンケートの結果を基に、2014年度のJATIS（以下JATIS2014-15[1]）が本学参加学生にどのような影響を与えたのか、とくに国際化の観点から分析する[2]。JATIS2014-15は、2015年２月１日に「イスラーム国」によるフリージャーナリスト後藤健二氏殺害を受け、大学としての総合的判断からトルコ開催が直前で中止となり、急遽国内代替プログラムに切り替えて実施された経緯がある。そこで、第三に、このような状況での国内実施の国際交流プログラムは参加学生にどのような影響を与えたのか、についても考察したい。

2014年度は、本邦の大学におけるグローバル化を考える上で、節目となる年であった。同年９月26日に文部科学省は、大学の国際競争力を高めるために重点的に財政的支援を行う「スーパーグローバル大学創成支援」の対象校を発表し、本学も「グローバル化牽引型」24校の一つとして

採択された。2節で詳述するが、これにより本学も研究・教育力の向上、教員の外国人比率の向上、外国語による授業の増加のほか、学生の海外への送出や、留学生の受入において、より野心的な方策を実現していかなければならない。そのためには、大学の建学の理念のもと、学生に対する国際交流プログラムの充実が重要な鍵となる。

本稿では3節および4節において、JATIS2014-15の実施過程の精査と学生のアンケートをもとに、その意義と課題を定性的に分析する。さらに5節において、学生アンケート結果に基づき、参加学生の「国際化」についての定量的分析を行う。これにより、定性・定量の両側面からJATISの意義と課題を浮き彫りにし、今後のJATISおよび同様の国際交流プログラムの計画・運営に反映させることを最終的な目的とする。

2. 本学における海外留学プログラムとJATISの位置づけ

本節では、本学における海外留学プログラムとJATISの位置づけを、とくに本学の「世界市民」の育成およびスーパーグローバル大学構想と関連させて確認したい。

2.1 本学の「世界市民」の育成とスーパーグローバル大学構想

本学では、平成23年度文科省大学の世界展開力強化事業「日加大学協働・世界市民リーダーズ育成プログラム」[3] が実施されている。また、平成24年度文科省国際化拠点整備事業費補助「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業」において「実践型“世界市民”育成プログラム」[4] 構想が採択された。これらの事業のもとで本学では、スクールモットー「Mastery for Service（奉仕のための練達）」を基盤とした世界に貢献する力を持つ「世界市民」の育成と、文部科学省のいうところの日本の国際力を高め他国との絆を強化することのできる「グローバル人材」、その双方の特徴を持つ学生の育成を目指している。

そして平成26年度には、文科省スーパーグローバル大学創成支援「グローバル化牽引型」にて本学の「国際性豊かな学術交流の母港「グローバル・アカデミック・ポート」の構築」が採択された[5]。この中で、学生のグローバル化に関連するところでは、平成35年度までに本学学生の協定校への派遣を年2500人（平成25年度は895名）に、同じく留学生の本学への受入を年1500人（平成25年度は913名）にすることなどが盛り込まれている[6]。

これら一連の事業は、学生が「世界市民」として卒業後活躍するための素地を大学4年間で育成することを目的としている。そのためには大学教職員が、学生に対して、早い時期から世界に目を向け、理解し、世界で活動することを促すことが求められる。

2.2 JATIS概要

では、このような大学全体の事業のなかでJATISはどのように位置づけられるのか。

本学では、2010年に外務省が実施した『トルコにおける日本年』を記念して、トルコ・コジャエリ大学とのJATISを開始した[7]。JATISではこれまで、両国の歴史・文化、平和や震災などをテーマに、両大学の参加学生が発表や議論を行ってきた。また、視察見学、演劇・演奏なども盛り込まれる。JATIS最大の特徴は、これら企画を学生が中心となって運営することである。毎年一回日本とトルコ交互に開催されるJATISでは、ホスト国の学生が主体的にプログラムを運

営する中で、言葉や文化の壁を越えて互いを理解し、世界市民としての素地を身につける機会を提供してきた。またJATISは本学が提供する国際プログラムの中では「第一段階」に位置するものであり、その意味で“Open Eyes[8]”プログラムとして位置づけられる。そのため、JATISでは英語のスコアといった応募要件を下げており、比較的容易に応募可能なプログラムとなっている[9]。この意味で、JATISは本学学生の国際化の出発点であり、その意義と役割が明確化され、「世界市民」となるための次の段階へと学生が移行することができるような、運営上の工夫が求められている。

3. JATIS2014-15の実施過程

本節では、JATIS2014-15における実際の運営過程を4つの段階に分けて、その内容を確認する。そして、それを通じて発見された当プログラムの意義と課題についても検討したい。

3.1 教職員による事前準備

本稿筆頭著者の市川が前年度に引き続きJATIS2014-15の担当教員となったのは、前年度日本開催のJATIS2013-14が開催される前の2013年12月であった。その後、日本開催のJATIS2013-14を本稿共著者の中村（当時JATIS担当事務職員）と共に実施し、コジャエリ大学から学生引率で来訪したハスレット・チョマク副学長およびセルダル・パムク国際センター長との間での信頼関係を構築した。しかし、中村は2014年度からJATIS担当ではなくなり、代わりに国際連携事務部松島章子氏がJATIS担当職員となった。松島氏はJATIS2014-15全体を通じて献身的に職務を遂行し、この交代は運営上大きな問題とはならなかったが、トルコ側との顔の見える信頼関係をJATIS開始以来一貫して担ってきた中村が担当事務として支える体制が崩れたこと[10]で、JATISは新たな船出となった[11]。市川と松島氏は2014年7月3日にJATIS2014-15の参加学生の出願・審査・参加者発表および事前研修・準備合宿について確認し、市川は7月22日、コジャエリ大学副学長および国際センター長にE-mailで松島氏を紹介し、JATIS2014-15の実質的な運営が開始された。

ここで一つの幸運が訪れる。それは、市川が本学学長室から、2014年8月25-29日の日程で、トルコ・イスタンブールで開催された第39回中東協力現地会議に派遣されたことである。このトルコ訪問の際、8月26日に、市川はコジャエリ大学を訪問する機会を得、先方の学長・副学長・国際センター長と会談した。ここで、直接本学のJATISに関する事務体制の変更について説明する機会を得たことは、先方との信頼関係の維持に寄与した。また8月27-28日に参加した中東協力現地会議では、在イスタンブール日本国総領事館総領事との知己を得た。また、トルコに展開する日本企業数社の駐在員の方々とも知己を得、JATISの意義について理解を得るとともに、渡航に関する情報提供や現地日本企業訪問などの企画の検討についても、お約束いただけた。国際交流プログラムにおける現地アクターの重要性を感じたイスタンブール訪問となった。

3.2 参加学生の選考過程

JATIS2014-15の出願書類の提出は、2014年10月9日で締め切った。前年度と出願書類に関して変更した点は、①語学能力を示す書類を提出するよう義務付けたこと、②書類審査の際に重視

するので応募理由をしっかり記入するように、と募集要項に明記したこと、であった。これは、市川がJATIS参加学生を書類審査する際、前年度に英語能力と参加理由を重視した経験[12]から、少なくとも「何によって」書類審査をするのかを学生に伝えるべきであると考えての変更であった。JATIS2014-15には33名の応募があった。例年、100名近い応募があるにもかかわらず、今年度の応募が少なかった背景には、４節で問題となる「イスラーム国」のシリアおよびイラクにおける活動が活発化していたことが挙げられる[13]。10月10日松島氏は出願書類を市川に渡し、市川は10月11日にこれらの書類をもとに書類審査を行い22名に絞り込み、10月18日に面接審査が実施された。書類審査では、まず、英語試験の点数上位10名を選抜した。残りの12名については、主に参加願にある「参加理由」の内容と、「学校での活動の経験・その他の社会活動」で顕著な経験を有していること、によって選抜した。面接審査は、１対１の面接方式を採用した[14]。グループ方式を採用しなかったのは、候補者の個性を会話の中で見極めたかったからである[15]。面接審査では、自分の意見を自分の言葉で伝えられるか、JATISに賭ける思いの強さ、準備過程への積極的参加姿勢、学生本人の「世界市民」としてのキャリアにJATISが資するかどうか、現在学んでいることとJATISとの関連性の強さ、を主要な基準として16名を選抜した。

ここで、昨年度の候補学生との違いが一つ明確に感じられた。昨年度の候補学生は、日本開催のJATIS2013-14のあと、翌年度のトルコ開催のJATIS2014-15への参加を強く意識していたが、今年のトルコ開催のJATIS2014-15候補学生は、翌年度の日本開催のJATIS2015-16に対してほとんど興味を示さなかったことである。このことは、国際理解教育における海外プログラム開催にあたり、それが異文化理解教育というよりは、誤解を恐れずいえば「修学旅行」的認識を学生が持っていることが伺える[16]。書類および面接審査で選抜された16名は以下のとおりである（性別・学部・学年）。A（女・社・３）、B（女・人福・３）、C（男・法・３）、D（女・法・３）、E（女・文・１）、F（男・総政・２）、G（女・法・２）、H（女・理工・２）、I（女・国際・２）、J（男・人福・１）、K（男・国際・１）、L（女・国際・１）、M（男・法・２）、N（男・教育・２）、O（女・総政・２）、P（女・総政・１）。

このうち、以前にJATISに参加していたのはJATIS2013-14に参加したMのみであるが、B・D・I・K・Nは国連セミナー・ASEANプロジェクト・外国語研修・中期留学などで本学の国際交流プログラム参加の経験を持っていた。10名は本学の国際交流プログラムにはこれまで直接の経験を持たず、その意味ではOpen EyesプログラムとしてのJATISの役割にかなった人選ができたと言える。その後、Gが一身上の都合で参加を取りやめたため、Q（女・経・２）を繰り上げて参加者として選抜した。

3.3　プログラム準備過程

上記選抜過程を経て、16名のJATIS2014-15参加者は2014年11月５日から水曜日６限に事前研修を開始した。事前研修は、以下のようなスケジュールで行われた。

第１回会合（11月５日）では、各自の自己紹介のあと、トルコ側から提示されていた日本側が主催するイベントについて学生に周知した。つまり、今回のJATISでは日本側がJapanese Dayを一日主催すること、それとは別に日本料理を提供すること、発表・議論のテーマとして①文化、②社会安全・社会保障、③地震、④ソーシャル・メディアの４つのテーマが設定されたこと、で

ある。これをもとに、参加学生とJATIS14-15でどのような活動がしたいかについて、ブレイン・ストーミングを行った。第２回会合（11月19日）では、第１回会合での議論を踏まえ、誰がどの役割を担うかについて議論した。決定された役割は表１のとおりである。第３回会合（11月26日）では、新しい取り組みとして、JATIS既習者（とくに過去のトルコ開催JATIS参加者）からの経験談を聞くことを意図して、トルコ交流セミナーOB/OG交流会を開催した。参加したOB/OGは４名で、全員がJATIS2012-13に参加したメンバーであった。ここでは最初の30分間、参加学生の前で、４名の既習者と市川とのディスカッション[17]をおこなった後、16名の参加学生を４つのテーブルに分け、それぞれのテーブルにつき１名のOB/OGを配置し、対話してもらった。OB/OGは15分で交代し、全員のOB/OGと各グループが対話できるよう工夫した。これはJATISにおいて初めての試みだった[18]が、参加学生はOB/OGの経験談をもとに、自分がトルコに滞在する姿を具体的にイメージすることができた様子であった。

表１　JATIS2014-15役割分担表

	Team 1	Team 2	Team 3	Team 4
カテゴリー１ 発表・議論	文化 B・D・Q・N	社会安全 I・J・K・P	地震 A・H・L・O	ソーシャル・メディア C・E・F・M
カテゴリー２ Japanese Day	祭り A・B・E・Q	○○道 I・M・O・P	運動会 C・F・K・N	伝統的遊び D・H・J・L
カテゴリー３ 日本料理	前菜 B・C・M・J	鍋 A・E・H・Q	お好み焼き F・I・L・N	おにぎり D・K・O・P
カテゴリー４ しおり・報告書	しおり B・D・F・L・M・O・P・Q		最終報告書 A・C・E・H・I・J・K・N	

第４回会合（12月３日）では、講師に慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科の小林周氏をお迎えし、講演会「中東地域の政治変動―「アラブの春」から「イスラーム国」まで」を開催した（図１）。小林氏は、2010年に起こった「アラブの春」と言われる中東諸国の反政府・民主化運動、それに影響されたシリア・イラクにおける「イスラーム国」などの武装勢力の活発化やサハラ砂漠地域の情勢不安定化など、多くの地域で政治変動が進んでいることを説明した。また、トルコとその周辺諸国を中心とした中東地域における政治変動について重点的に解説していただき、参加学生にとっては中東情勢への理解と関心が高まった。12月６－７日には準備合宿を開催した。ここでは、表１のカテゴリー１から４の業務毎に、それぞれ90分間のグループワークを行った。７日の午後には、カテゴリー１については発表・議論の方向性に関する指導を担当教員が、カテゴリー２と３については企画と費用に関する精査を担当教員と事務職員が、学生に対して行った。第５回会合（12月10日）では、ムラト＝ヒュダヴェンディガル大学の井藤聖子氏をお迎えして、講演会「トルコ入門」を開催した（図２）。井藤氏には、トルコの地理、歴史、言語、文化、現代のライフスタイルについて、自身のトルコ滞在のエピソードも交えて講演していただいた。さらに、イスタンブール市消防局勤務の技術官ファティーフ・ビルギン氏も参加され、トルコにおける災害復興についての話も聞けた。学生は、講演会終了後も１時間近くにわたり両氏に質問するなど積極的に参加した。第６回会合（12月17日）では、最初の１時間、旅行会社および保険会社の担当社員から渡航説明が行われた。また、最後の30分で、これまでの各グループの

進捗状況を担当教職員と参加学生との間で確認した。第７回会合は年明けの2015年１月７日に開催された。ここでは担当教員により、カテゴリー１の発表原稿へのコメントが行われた。

以上のように、JATIS2014-15では、OB/OG 交流会や２回にわたるトルコ・中東関係の講演会など、参加学生の知的好奇心を刺激し、また、現地での生活について具体的イメージが湧くよう工夫して事前準備を設計した。この過程を通じて参加学生は、徐々に JATIS やトルコそのものへの関心を高めていった。

図１　小林周氏の講演の様子

図２　井藤聖子氏の講演の様子

しかし、課題も残された。第一は、合宿の時期である。今回は第４回会合の後に合宿を設定したが、もっと早く開催すべきだった。現実に学生たちが各カテゴリーのグループワークを開始したのは合宿後であり、それにより明らかに準備不足となった。第二に、イベントを多数設定したことで、本来参加学生に担当教員が伝えるべき、グループワークの技法、異文化理解教育として単位の認定される「科目」としてのトルコ交流セミナーの「あり方」、さらには、学生の自主性が「どこまで」認められるかといった確認[19]が疎かになったことである。これは、のちに教職員と学生の認識の違いとなって表出する。第三に、これは第二の点とも関連するが、国際交流プログラムにおける教員のあり方について、学生に理解させる時間が不足したことである。国際交流プログラムにおける教員は、その初期においては参加学生との距離を縮めて助言や指針を与え、学生がある程度作業を自主的に進めるようになったら自主性に任せながらも、進捗に応じて企画の精査や発表原稿に対して教員として、また、大人として厳しく指導する[20]、という多面的な役割を果たさねばならない[21]。ただしこれは、今回のように予定の詰まった準備過程では、適切な対応を図ろうとする教員の意図とは別に、参加学生から見ると、態度がコロコロ豹変する大人としてラベリングされる恐れがある。こうした教員の多面的役割、また、どのような場合に学生が教職員に相談すべきか、という点について、参加者に理解させる時間が必要であった。

3.4　実施される予定であった JATIS2014-15

3.3で確認したような準備期間を経て、また、学生はその後も自主的に、トルコ・コジャエリ大学への渡航準備を進めた。カテゴリー４の「しおり」チームは立派なしおりを作成し、学生Ｂがデザインした JATIS2014-15の手ぬぐいも完成した。本来実施される予定であった JATIS2014-15の予定は表２のとおりである。

いささかツアーが多いが、トルコ側の参加学生の多くが前年度の JATIS 経験者（日本で日本

表 2　JATIS2014-15プログラム

2/8（日） 21:20　関西国際空港集合 23:20　TK47にて関西国際空港発	2/14（土） 9:00-18:00　Japanese Day 19:30-23:00　伝統的トルコ料理
2/9（月） 5:40　イスタンブール国際空港着→移動 9:00　コジャエリ大学着 11:00-12:00　アイスブレーク・ゲーム 13:30-15:30　キャンパス・ツアー 17:00-18:30　ウェルカム・セレモニー	2/15（日） 9:00-12:00　発表・議論（社会安全） 14:00-17:00　発表・議論（地震） 19:30-23:00　ナイト・アウト
2/10（火） 9:00-12:00　発表・議論（文化） 13:00-18:00　コジャエリ文化ツアー 19:30-20:00　チャナッカレ・ツアー説明	2/16（月） 9:30-13:00　トルコ料理・日本料理 15:00-18:00　発表・議論（ソーシャル・メディア） 19:30-20:30　カッパドキア・ツアー説明
2/11（水）　8:30- 2/12（木）　21:00 チャナッカレ・ツアー（ダーダネルス/エジェアバト/ゲリボル半島国立歴史公園を含む）	2/17（火）　9:00- 2/18（水）　20:00 カッパドキア・ツアー（ギョレメ岩窟教会/カイマルク/アンカラ/アタテュルク廟を含む）
2/13（金） 7:00-23:00　イスタンブール・ツアー	2/19（木） 9:00-11:00　フェアウェル・セレモニー 14:00-18:30　ショッピングセンターにて買い物 24:50　TK46にてイスタンブール国際空港発
	2/20（金） 18:55　関西国際空港着→解散

文化に触れ、京都・広島などへのショート・トリップを経験）であったこともあり、ホスピタリティあふれるプログラムであった。アンカラ、イスタンブールといった大都市への訪問、チャナッカレやカッパドキアといった有名な観光地への訪問、さらにはナイト・アウト（躍り/歌）などが設定され、日本人参加学生も多くがこれに期待していた。

4. 渡航中止と国内代替プログラムの実施

本節では、2015年２月８日の渡航を控えた一週間前から急遽状況が変わり、渡航中止に至る過程を概観する（4.1）。そして、担当教員の提案で国内代替プログラムに変更する過程と、国内代替プログラムおよびその意義についても検討する。

4.1　渡航中止

JATIS2014-15は「イスラーム国」による日本人人質殺害事件によって急転直下の状況の変化に晒された。振り返ればJATIS2014-15はその企画・運営段階から「イスラーム国」の影響を受けていた[22]。しかし、2015年２月１日早朝、後藤健二氏の殺害映像がインターネット上に公開され、その映像中に「場所を問わず日本人を殺害する」との声明があったことが事態を急変させた。安倍首相はこの事態に「日本がテロに屈することは決してない。」と発言[23]、これにより更なる邦人の被害を食い止めるために、関係機関が対応に追われ緊張感が高まる事態となった[24]。

本学でも、事態の急変を受け、国際連携機構長・副機構長および同事務部部長・次長が外務省・現地大使館・現地領事館を中心として情報収集にあたったほか、担当教職員は相手校のコジャエリ大学教職員、同大にて交換留学で学ぶ本学学生、JICA などから情報を収集した。この時点で既に、参加学生および保護者数名から実施に関する問い合わせが寄せられていた。２月２日に

は、在イスタンブール日本国総領事館（2015.1.27）の情報に基づき、テロの標的となりやすい大都市への滞在[25]および公共交通機関の利用を外すかたちで、コジャエリ大学にプログラム変更依頼を行う、という仮方針が立った。

しかし２月３日、文部科学省の２月２日付通知を落手し、そのなかで「各大学等におかれては、学生等が海外に滞在している場合又は新たに渡航する場合は（中略）学生などの安全を確保するようお願い」する旨の記載があった[26]こと、さらには、在イスタンブール日本国総領事館からのE-mailで、現在のイスタンブールの海外危険情報は危険レベル１「十分注意してください」であるものの、かぎりなく危険レベル２「渡航の是非を検討してください」に近い旨伝えられたこと[27]、が仮方針を覆した。これを受け本学関係者は、現地の状況を危険レベル１ではなく危険レベル２とみなすこととし、トルコ交流セミナー危機管理対策の指針に則り[28]、緊急の検討会を２月４日に開催した。中断を含む計５時間におよぶ検討会議には、国際連携機構長・同副機構長・同事務部部長・担当教職員が出席し、ここで諸般の情報を分析し、社会通念や心配する声への配慮を行い、「総合的に勘案した結果として大学の判断で中止」となった[29]。この決定に基づき、松島氏はコジャエリ大学に渡航中止の連絡し、また本学参加学生に対しても中止の連絡をした。これは、渡航４日前に下された決定であった。

この間、市川には担当教員として、もう一つの苦悩があった。それは、これまで熱心に準備をした学生の準備が無駄にならないような、また、単位を付与するための方策はないか、という点であった。そこで国際連携機構副機構長・同事務部部長/次長との協議の中で具体化したのが、「国内代替プログラムの実施とそれによる単位の付与」である。これについては２月５日の午前中までに実現の方向性が見えてきたことから、同日午後学生に対してE-mailで市川から国内代替プログラムの実施を提案した[30]。

4.2　国内代替プログラム

２月６日、学生と担当教職員の間で国内代替プログラムについて検討する会議が開催された。午前中は学生だけで、渡航中止と国内代替プログラムに関する議論を行い、午後に担当教職員も呼ばれて学生からの質問に対応した。3.2で市川が感じていた学生の「修学旅行」的気質は、ここで明確に示された。大半の学生から、「渡航中止の発表が遅い」「本当にトルコ行きを実現するために教職員が努力したのか」「トルコに行けないのなら参加の意味がない」といった趣旨の発言があった。市川は、状況を説明し、苦境にあっても何らかの方法で国際交流を行うために努力をすることの重要性を伝えた。この齟齬は、3.3で指摘した準備段階の課題から説明がつく。つまり、参加学生に対して異文化理解教育としての国際交流プログラムの意義を、担当教員が十分に伝えきれていなかったことである[31]。

竹内（2012）は、教育現場における異文化理解が、世界の他の国々に関する知識習得のことのみを意味すると捉えられているきらいがあり、異文化理解は外国との交流をすることによってのみ深まるとの認識が大学生に存在することを指摘している[32]が、まさにこの状況が目の前に現れたわけである。竹内はさらに、「英語が話せれば、国際交流が出来て、異文化理解も生まれる」というような「異文化理解」に関する認識を「安易な図式」と喝破し[33]、語学運用能力や海外事情に関する知識のみならず、異文化接触場面における対人関係スキルなどを含む「異文化理解能

力」の習得が重要であると説く[34]。そしてそのような能力においては、①関係構築と維持の能力、②情報伝達の能力、③承諾を獲得できる能力、が重要とされる[35]。これは、国内代替プログラムといった脱場所化した状況においても、学生が努力次第で習得可能な能力である。市川はこの時点で、上記認識を学生に伝えたが、これは明らかに遅きに失した。渡航４日前に突如渡航中止を通告され精神的に落ち込んでいる参加学生には、何を言っても大人の言い訳に聞こえたかもしれない[36]。２時間におよぶ学生との質疑応答の後、学生たちは話し合いを続けた。その結果、16名の参加者のうちＥとＦを除く14名が国内代替プログラムに参加することとなった。

4.3　国内代替プログラムの実施過程

教職員と14名の学生は、２月６日中に代替プログラムを作成した（表３参照）。これ以降の学生の前向きな態度は、大いに評価に値するものであった。

国内代替プログラムは２月９日から開催された。２月９日はガイダンス後、学生は準備していたコジャエリ大学教職員・学生向けのお土産にメッセージをつけて国際小包で送った。その後、英語での発表の予行練習を行い、担当教員は各チームの発表への指導を行った。夜は、学生の発案でJATISの今後の継続を祈って、ペンライトアートを実施した（図３）。２月10日は、本来セレモニーの席で披露するはずであったトルコと日本の歌を学生全員で歌い（図４）、これを録画・編集した。午後には英語での発表の本番を行い、その模様も録画・編集した。その後、Japanese Dayで行うはずだった企画を実際に行い、これも録画・編集した。これらの映像は編集が終了し次第、２月15日までにFacebook上でコジャエリ大学参加学生に向けてアップした[37]。トルコ学生からは、トルコの歌の映像をはじめとしてこれらの映像に多くの反響が寄せられ、日本人学生とトルコ人学生との間でコメント、メッセージおよびスカイプといった形でのやり取りが急増した。学生の柔軟なコミュニケーション能力の一端を垣間見た。

表３　JATIS2014-15国内代替プログラム

２/９（月）	
10:00-11:30	ガイダンス
12:30-14:00	コジャエリ大学へのメッセージ作成
14:10-15:40	発表指導
15:50-17:20	発表指導
17:30-19:00	ペンライトアート
２/10（火）	
10:00-11:30	日本の歌・トルコの歌
12:30-14:00	発表録画
14:10-15:40	発表録画
15:50-17:20	自己紹介録画・Japanese Day 企画録画
17:30-19:00	映像編集作業
２/15（日）	
11:00-12:00	神戸ムスリム・モスク訪問（レクチャー）
12:00-13:30	トルコ料理体験
13:30-17:00	トルコを探せ！
20:00-23:00	映像編集作業（スポーツセンター泊）
２/16（火）	
9:00-9:30	食材買い出し
9:30-12:30	日本料理録画
13:00-15:00	映像編集作業
15:00-16:00	ディスカッション準備
16:00-18:30	遠隔会議システムにてトルコ学生と議論
20:30-23:30	スカイプにてトルコ学生とチャット
２/17（水）	
11:00-12:00	トルコを探せ！
12:00-14:00	トルコ文化体験
14:00-15:00	大阪トルコ日本協会訪問（レクチャー）
15:45-16:50	閉会セレモニー
16:50-17:50	アンケート記入

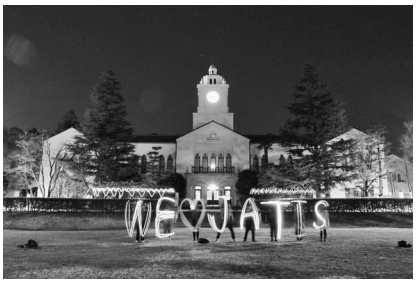

図３　ペンライトアート

図４　トルコの歌収録

図５　神戸ムスリム・モスク訪問

図６　トルコ人学生とのスカイプ・チャット

２月15日には、神戸ムスリム・モスクを訪問した（図５）。ここでは、理事長の新井アハサン氏からイスラームについて、また日本に住むムスリムについてレクチャーを受けた。その後トルコ料理体験をはさんで、学生たちは４グループに分かれて「トルコを探せ！」と題するグループワークを行った。これは、関西圏においてもトルコ人およびトルコ文化は多く存在することから、参加学生自らトルコ的要素を発見し、可能であればインタビューなどを行い、能動的に異文化体験を行うことを企図していた。この模様は各グループ映像として録画し、２月16日に編集の上、映像としてトルコ側の学生に送り、日本国内に多く存在するトルコ的要素について相互に理解し合う契機となった[38]。２月16日は午前中に日本料理をつくり、その過程を録画・編集した。午後は、遠隔会議システムやスカイプを利用して、深夜までトルコ人学生との議論やチャットを行った（図６）。これまで参加学生が映像や写真を、Facebook を通じてトルコ人学生に伝えていたこともあり、学術的に深い議論はできなかった[39]が、互いの友情をあたためることができた。２月17日は午前中に大阪で「トルコを探せ！」第二弾を行った後、トルコ料理を楽しみながらベリーダンス見学を行った。その後、大阪トルコ日本協会にてビンギョル・アリ副理事長と面談し、日本とトルコの関係、日本におけるトルコ人の生活などについてレクチャーを受けた。一行はその後大学に戻り、国際連携機構副機構長・同事務部部長を含めて閉会セレモニーを行った。その際、参加14名の学生は１分間スピーチをしたが、そこにはもう「修学旅行」的気分はなく、日々の生活の中でも国際交流・異文化理解が可能であるとのポジティブな感想を聞くことができた。最後に担当教職員がコメントをして、JATIS2014-15国内代替プログラムは終了した。

5. JATIS2014-15と学生の国際化

本節では、当プログラム開始前後２回実施したアンケートに基づいて、参加学生の国際化の意識の変化、国際化に必要な情報発信に注目して定量的な観点から分析を行う。

5.1　本学の国際化に対する学生の認識

これまでの環境に対する国際化の程度を質問すると大学の国際化が焦点となった。クラスカル・ウォリス検定の多重比較から大学と小学校（S.T＝-4.227，adj. p＝.002）、中学校（S.T＝-3.870，adj. p＝.011）、居住地域（主に育った地域）の国際化への対応（S.T＝-4.026，adj. p＝.006）、小学校から高校までの国際化教育への満足（S.T＝-4.661，adj. p＝.000）に差があった。大学の国際化の平均値の高さから、学生が大学前後の教育課程や地域の国際化と異なり、学内の国際教育の環境が一定程度理解を得ていると評価できる。

5.2　日本の国際化についての学生の認識

国の国際化を問う集計結果（表４）では、多く項目の平均値は下がるが、英語以外の言語の教育機会の充実、外国人旅行者に対応した法整備、自国の政治/選挙/経済/社会/文化/社会的病理/刑罰に関する情報発信が上がっている。これらは教育による長期的な環境醸成に加え、国の状態を伝える情報発信の重要性が高まった印象を与え、学生が本プログラムで国内情報の発信による国際化の重要性を理解したことを示す。回答者数が若干異なるため、２回ともに回答した学生の回答をベースにしながら、その差異をウィルコクスンの符号付順位検定で確認したところ、有意

表４　国際化に必要な情報発信

	１回目				２回目			
	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差
外国人旅行者数の多さ	4	4	4.00	.000	1	5	2.93	1.072
外国人居住者の割合	2	5	3.88	.806	2	5	3.29	0.825
外国人の地方参政権を認める	1	5	3.63	1.204	2	5	3.21	0.975
外国人の国政参政権を認める	1	5	3.38	1.258	2	5	3.29	0.994
英語教育の充実	2	5	4.19	.981	2	5	4.07	0.829
英語以外の言語の教育機会の充実	3	5	4.13	.719	4	5	4.43	0.514
小学校以下の外国語教育の必須化（実践）	2	5	3.63	1.204	1	5	3.57	0.938
外国人旅行者に対応した法整備（規制を含む）	3	5	4.25	.577	3	5	4.36	0.633
外国人居住者に対応した法整備（規制を含む）	4	5	4.38	.500	0	5	4.07	1.385
国際結婚に十分対応した法整備	4	5	4.38	.500	2	5	4.00	1.109
外国人向けの日本語の学習機会の確保	2	5	4.19	.911	2	5	3.86	1.167
外国人向けの日本の習慣・マナーの学習機会の確保	3	5	4.38	.619	2	5	3.86	1.231
自国の政治に関する情報発信	2	5	3.94	.854	2	5	4.29	0.914
自国の選挙に関する情報発信	2	5	3.69	1.078	2	5	3.93	0.917
自国の経済に関する情報発信	2	5	3.81	.981	2	5	4.21	0.802
自国の社会に関する情報発信	2	5	4.13	.885	4	5	4.50	0.519
自国の文化に関する情報発信	2	5	4.19	.911	4	5	4.50	0.519
自国の社会的病理に関する情報発信	2	5	3.63	.957	3	5	4.36	0.633
自国の刑罰に関する情報発信	2	5	3.37	1.025	2	5	3.86	0.864
国交をもつ国の数	1	5	3.88	1.310	3	5	4.07	0.829

※１回目の回答者数は16名、２回目は14名

表５　国際化の自己評価

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
（前）自分が国際的であると思う	16	1	4	3.00	0.966
（後）自分がより国際的になったか	14	2	5	4.07	0.829

水準５％を満たした項目は、外国人旅行者の多さ（p＝0.012）、外国人居住者の多さ（p＝0.030）、社会的病理に関する情報発信（p＝0.021）の３つである。ここから、単に外国人が多いという環境を超えて、その変化から生じる多様性の受容、社会の負の特性を理解させる適切な情報発信の重要を、参加学生がより意識したことになる。

5.3　国内代替プログラムによって学生は国際化したのか

次に、プログラムの前後で国際化の自己評価（表５）では、平均値は上昇し、ばらつきも減った。さらに、２回とも回答した13名の回答から、マン・ホイットニーのＵ検定結果から全体でみると前後で差がある可能性が高い[40]。ウィルコクスンの符号付順位検定の結果から個人レベルでも国際化に対する自己評価は緩やかに上昇した可能性がある（p＝0.054）。また、プログラム開始前の期待度と参加後の国際化の自己評価の間における相関（r＝0.554, p＝0.049）から、急なプログラム変更はあったものの、当初の期待を大きく裏切らずにプログラムを参加者が終えられたとの見方が可能となる。

5.4　プログラム参加後の参加学生の自己評価

自己の反省点に関する評価スコアを用いた主成分分析（表６）から、知識や経験の不足、対人関係、自身の将来、社会貢献と名付けられる成分が抽出できた。これらの成分と国際化の自己意識と社会貢献には関係の変化が見られた。１回目（r＝-.691, p＝.009）から２回目（r＝.550, p＝.042）の数値の変化は、今回の機会により、自国のこと、身近なコミュニティへの理解を高める必要性を学生高められたことが察せられる。

5.5　渡航中止と国内代替プログラムについて

プログラムに関する自由回答では、急なトルコへの渡航中止についてコメントする学生が複数見られた。それと同時に、映像による交流には一定程度の満足と不満が混在していた。これらは国際情勢が学生たちにも身近であることと、現地で直接交流できたらより高い満足度やコミュニケーションをとれたかもしれないという学生の声をあらわす。もちろん、細かい改善点あるものの、プログラム、その運営への評価もポジティブなものといえる。

表 6　プログラム参加後の自己評価に関する主成分分析

	主成分 1	2	3	4
	知識や経験の不足	対人関係	自身の将来	社会貢献
国際社会に関する知識の不足	.904	.003	-.193	.217
世界の文化に関する知識の不足	.895	-.013	-.225	-.016
日本人間で、一般的な社会的常識の無知さ	.873	.133	.033	.243
国際政治経済に関する知識の不足	.841	-.186	-.362	.033
日本の社会システムに関する知識の不足	.826	-.218	.144	-.186
自分の担当部分の企画力（＝計画性＋実行性）のなさ	.824	.455	-.081	.112
大学における勉強が不真面目/努力不足だった	.815	-.004	-.021	-.225
日本という「国」への評価に関する知識の不足	.699	-.283	-.281	-.393
トルコという国や社会を理解する事前努力（学習）が不十分	.683	.386	.490	.101
日本の文化・慣習に関する知識の不足	.678	-.355	-.380	-.480
質問力/確認力（曖昧なまま物事を進めた）が欠如	.622	.552	.239	.334
日本の政治・行政システムに関する知識の不足	.578	-.424	.113	-.351
メンバーとの協調的に行動・活動を出来なかった	.289	.877	-.208	-.186
他者（の意見）に対する寛容さのなさ	.385	.769	-.216	-.126
メンバーを適切に評価する能力を欠いていた	.135	.713	-.103	-.365
（コミュニケーションを含む）語学力の不足	.449	-.710	.175	.309
日本経済に関する知識の不足	.527	-.624	.389	-.271
卒業後の進路に対する考え方の曖昧さ、甘さ	.562	.179	.710	-.069
社会に対する甘えがある	.416	.293	.610	.338
大学イベントへの参加の必要性を感じた	.451	-.288	-.603	.352
地域への参加の重要性を認識した	.381	.131	-.392	.640
親・保護者への甘えがある	.202	-.541	.094	.553
固有値	9.021	4.488	2.594	2.332
分散の%	37.589	18.700	10.808	9.719
累積%	37.589	56.289	67.097	76.816

6. 結語

以上の定性・定量の分析をもとに、1で示した本稿の目的である三つの点をまとめたい。

第一に、JATIS の意義と課題の明確化について。JATIS は本学の国際プログラムにおける Open Eyes の役割を担うものだが、定性的には国内代替プログラムへの変更後の学生の積極姿勢、定量的には5.3で示したようなプログラム開始前の期待度と参加後の国際化の自己評価の正の相関によって、その役割は果たしたものと評価できる。課題としては運営にあたり、単位化された異文化理解教育の一翼を担うプログラムであることを担当教員が学生にしっかりと明示すべき点である。その際、異文化理解とは何か、異文化理解能力とは何か、学生の主体性とは何か、といった点について、準備過程の初期にきちんと説明すべきである。

第二に、JATIS2014-15が参加学生の国際化にどのような影響を与えたのかについて。今回は残念ながら急遽国内代替プログラムの実施となったが、それでもなお学生が国際情勢に関心を示し、身近なコミュニティからグローバル化を考え、国内の情報を海外に発信することの重要性に気づいた点[41]は評価できる。

第三に、国内代替プログラムによる実施となったことについて。もちろん、渡航できるに越したことはなかった[42]が、渡航中止という状況の中でも、参加学生が次の段階に向かうために必要な自らの国際化を図り、日本国内にいながらも、地元の地域から世界まで、広範な社会全体に目

を向けることができた[43]ことは心強い。また、映像作成による情報発信をトルコ側にした点については、学生の中で評価が割れた[44]ものの、このような人工言語（IT スキル）も自然言語（英語など）と同様に、コミュニケーション・ツールとして重要であることに気づいた学生[45]がいた点も評価できる。

最後に、学生Ｉのアンケートから文章を抜粋して稿を閉じたい。

「セミナー参加前は“海外や関学内の学生の交流を深めて多くのことを学び、それを将来の生活や職に生かす”という風に、このプログラムを目的のための手段として捉えていましたが、自分のゴールに直接的に関係していないことでも、興味があることは積極的にチャレンジしていこうと考えるようになりました。また JATIS のメンバーに出会えたことで、自分に必要な力や気質を実感することができました。あと２年の大学生活の中で様々な分野のプログラムに参加して、多くの人との関わりの中で自分を高めていきたいです」。

このような認識の変化こそが、究極的には、JATIS に求められる「世界市民」育成のための国際交流プログラムの役割であり意義であろう。

注

1　2013年度に実施した日本開催の JATIS2013-14については、市川・山本・中村（2015）を参照のこと。
2　本研究は、2014年度関西学院大学高等教育推進センター共同研究助成、研究名称「トルコ交流セミナーの役割と意義に関する研究」、を受けて実施されたものである。
3　ここでは、カナダのマウント・アリソン大学、クイーンズ大学、トロント大学と共同で“Cross-Cultural College”を設置・運営し、日加両国の学生が課題の発見・解決、さらには多文化共生のもとでグローバル社会を発展・成長させる世界市民の育成を目指している。
4　ここでは英語能力だけでなく異文化適応能力や課題を発見・分析・解決能力の涵養が目的とされる。
5　ここでは、①全学生に「外（アウェイ）」に出ることを課す教育 OS を独自に設計・導入すること、②国際流動性強化（学生については海外派遣、留学生受入と日本人学生との融合を図ること）、③高大連携で早い段階からの知識・経験の付与および複数研究科による「国連・外交コース」を設置すること、④米国の新たな学習成果測定モデルづくりにオブザーバー参加し、本学への導入を企図すること、⑤理事長・学長のリーダーシップを支える「総合企画室」を設置すること、を５つの柱としている。
6　関西学院大学（2014）による。
7　詳細については市川・山本・中村（2015）p. 46を参照のこと。
8　「世界市民」としての次のステップを目指すために、まずは「目を開く」こと。
9　市川・山本・中村（2015）p. 46。
10　市川・山本・中村（2015）p. 53では、まだ歴史の浅い JATIS を大学間国際交流プログラムとして安定化させるためには、本学と先方のキーパーソンを可能な限り据え置くなどの措置が必要であると指摘していた。
11　一方で、本学国際連携機構事務部は、松島氏のアドバイザーとして中村を配置してくれており、これにより事務的な流れは非常にスムーズであったことは、運営上の工夫として指摘すべきであろう。
12　市川・山本・中村（2015）pp. 47-48で、選抜の基準をある程度明示した方が、学生が応募しやすいことを指摘していた。
13　実際、出願期間中に国際教育・協力センターや担当教員の市川には数件、安全性に関する質問をするため学生が訪問していた。しかし、この時点では、外務省の海外危険情報はイスタンブール周辺のみが危険レベル１「十分注意してください」であり、情報収集は怠らないものの、注意して実施するというレベルであった。

14　面接では、以下の７問については共通して候補学生から話を聞いた。① JATIS の志望動機、② JATIS で企画したいテーマ、③ JATIS に対してどのような点で貢献可能か、④あなたの得意なこと、⑤あなたが大学で勉強していること、⑥11月から始まる準備会と準備合宿にすべて参加できるかどうか、⑦今回の応募は、来年度の JATIS（日本開催）への参加が前提か、である。

15　しかし、このことは逆に、グループワークをする上で協力的でシナジー効果を発揮できる学生を選べているかどうかという点においては、検討する余地がありそうである。JATIS のように学生が主体的に運営するプログラムの場合、集団の中でどのような振る舞いをする学生かを事前に担当教員が知っておくことは、２年間の経験から、とても重要である。その点では、集団と個人の面接を併用するなど、選考過程に工夫が必要かもしれない。

16　田所・渡部（2013）p. 12では、「国際交流はどうしても教育・研究の範疇から外れた「遊び」としてとらえられる節があるため、国際交流プログラムを教育プログラムとして位置づけること」が重要であると指摘する。また、細谷ら（2003），p. 137でも、「国際交流が珍しさや楽しさだけを求めるものではない」と明記し、この認識のずれは多くの国際交流プログラム実施教員の感じるところとなっている。

17　①なぜトルコ交流セミナーに参加しようと思ったのか、②トルコ人学生との交流を経て、あなたが得た「気づき」は何か、③トルコ交流セミナーに参加して、あなたは以前と比べどのように変化したか、④トルコ交流セミナーのあと、別の国際交流プログラムに参加したか、⑤就職や進学をするにあたって、トルコ交流セミナーから得たものは、助けや指針となっているか、の５問の質問に答えてもらった。

18　市川・山本・中村（2015）p. 57にて、OB/OG 会の開催を提案していた。

19　植木・高橋（2012）p. 239では、「主体性」を求める神話、として以下のように指摘する。つまり学生の意思に沿って行われる学習活動を過剰に評価し、理想化する傾向がある、というものだ。JATIS は単位の出る異文化理解教育であり、学生が好き勝手行動して良いわけではない。あくまで、単位要件の中で学生の意思・意図を教職員が上手に汲みながら運営されるべきことである、という点を確認すべきである。

20　学生Ｏのように「プレゼンなどの勉強面での指導や課題は私にとって大変貴重なものでしたが、大人としての対応や情報共有の方法などの指導も大変勉強になりました」と記述した者もいる。

21　長岡（2012）p. 140はこのような教員の役割を、民主的、放任主義的、独裁的と表現する。

22　2014年８月上旬に湯川遥菜氏がシリア北部で拘束されたことが判明し、10月下旬には後藤健二氏がシリアで行方不明になった。2015年１月20日には「イスラーム国」とみられる組織による日本人殺害予告のビデオ声明を日本政府が確認し、そのなかで２億ドルの身代金を72時間以内に支払うよう要求がなされた。１月23日にはその期限である72時間が経過し、１月24日23時過ぎに殺害されたとみられる湯川氏の写真を後藤氏が手にする画像がインターネット上で公開された。１月25日１時すぎに安倍晋三首相は「テロ行為は言語道断の許しがたい暴挙」と発言、早朝にはオバマ米大統領も湯川氏の殺害について非難声明を発した。日本経済新聞（2015.1.26）。

23　日本経済新聞（2015.2.2a）

24　日本経済新聞（2015.2.2b）

25　警察・軍・政府施設・政党施設・大型ショッピングモールを避けるため。

26　文部科学省（2015.2.2）

27　これは2014年８月に市川が中東現地協力会議に出席し総領事と知己を得ていたことが大きい。

28　危険レベル１では「実施、継続するが注意を払う。学生に対しても自ら情報収集するよう指導する」であるが、危険レベル２の場合には、「情報を収集し、延期若しくは中止（国外退避・途中帰国）の検討をする」となっている。

29　国際交流プログラムにおける危機管理については文献が少ないが、藤田（2012），p. 67は「多分大丈夫だろうという考えに陥りがちであるが、それこそがまさに危機である」と述べ、慎重な安全管理の必要性を説く。これを踏まえて、本稿の筆頭著者は、今回の決定は妥当なものであると考えている。

30　そこでの提案は、以下のとおりである。①「イスラーム国」が恐怖の拡散のツールとして使った映像・インターネットを、日本とトルコの友好のために使うこと、②国内で参加学生が準備してきた発表・日本料理・Japanese Day の企画を実際に行い、映像化してインターネットでトルコ側に送ること、③日本国内でトルコ的要素を見つけ出し、それを映像化してインターネットでトルコ側に送ること、④せめて１日だけでもトルコ側の参加学生と遠隔授業システムおよびスカイプを使ったセッションやチャットを行うこと、である。

31　学生Ａは、「今後の JATIS を行う上で大切なことは学生同士で、なぜ異文化交流をするのか、異文化交流とは何なのか、ということを共有すること、教員と学生のコミュニケーションを密にして、お互いが何ができるのか、何が求められているのかを知ること」と記述している。

32　竹内（2012）p. 106。

33　竹内（2012）p. 106。

34　竹内（2012）p. 105。

35　平田（2014）pp. 45-46。

36　学生Ｐは「市川先生と松島さんの、トルコ行きが中止になった時の説明、本当にありがとうございました。しかたないと思いつつ、納得のいってなかったことを、受け入れて切り替えることができました」、学生Ａは「教員と学生の間にあった思い違いも本心を語り合うことで解消され、教員と学生で、それぞれができることを懸命にしようという機運が高まった」と記述している。

37　Facebook のグループ上で、これらの映像をやり取りした。
https://www.facebook.com/groups/309473542578965/

38　学生Ｊは「他国と関わっていく上で、他国のことを知ること以上に、自国のことを知り、考え、理解することが重要である」と記述している。

39　学生Ｃは「やはり画面越しの議論では伝えきれない部分が多く生じた」と記述している。

40　分析結果の概要は以下の通り。N＝26，検定統計量 U：135.000，標準誤差：18.296，標準化検定統計：2.760，P＝0.009.

41　学生Ｉは「海外交流に対する自分の価値観を根本から見直す良い機会」となったと記述している。

42　学生Ｐは「トルコに行けなかったことはやはり大きいです。トルコ人学生とスカイプ越しでもあんなに話ができたのなら、２週間共に過ごすことでもっと深い友情が築けたのでは、と考えてしまいました」、学生Ｋは「トルコに行けなかったことは残念」、学生Ｈは「渡航中止を伝えるメールが流れたのは、渡航予定日の４日前で、とても急でした。私はもうほとんどパッキングが終わっており、荷物を取り出すのは悲しい気持ちになりました」と記述している。

43　日本の大学生の「国際化」にとって重要な点として学生Ｋは「国内にいながらも海外の情報を入手し分析する力」、学生Ｌは「学んだことをアウトプットする機会を学生自身が見つけて参加すること」と記述している。また学生Ｎは「異文化交流は海外で、現地に行ってでしか体験できないものだと思っていましたが、実は私たちの身の回りにはこんなにもたくさんの異文化がひそんでいることに気づけました」と記述している。

44　学生Ｄは「映像の編集作業は、やったことがなかったし、知識もなかったので最初はあまり積極的になれなかった」、学生Ｍは「普段 PC を使った動画編集などをしないあまりに、動画編集で同じグループだった友達にとても負担をかけてしまった」、学生Ｂは「動画編集など行動や活動できる範囲が個々で異なっていた」と記述している。

45　学生Ｑは「今回のプログラムのように IT を駆使して交流する機会があれば、コミュニケーションの無限大性が伝わると思うので、そういったことを含む関西学院大学の国際交流プログラムがあればいいと思った」と記述している。

参考文献

市川顕・山本竜大・中村圭（2015）「JATIS2013-14に基づく大学間国際交流の意義と課題」『産研論集』第42号　pp. 45-57。

植木節子・高橋博代（2012）「国際的な問題を身近にとらえる校外学習」、『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻　pp. 239-247。

関西学院大学（2014）『文部科学省平成26年度「スーパーグローバル大学創成支援」採択構想調書―国際性豊かな学術交流の母港「グローバル・アカデミック・ポート」の構築―』関西学院大学。

在イスタンブール日本国総領事館（2015.1.27）『安全対策連絡協議会～イスタンブール治安情勢～』外務省。

竹内愛（2012）「「異文化理解能力」の定義に関する基礎研究」、『共愛学園前橋国際大学論集』第12号　pp. 105-112。

田所真生子・渡部留美（2013）「名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラムの試み」『名古屋大学留学生センター紀要』第11号　pp. 5-13。

長岡真理子（2012）「異文化との出会い：教室内で異文化意識を高める」『文化学園大学紀要人文・社会科学研究』第20巻　pp. 137-148。

日本経済新聞（2015.1.26）「死刑囚釈放要求　難局なお」朝刊３面。

日本経済新聞（2015.2.2a）「首相会見の全文」朝刊２面。

日本経済新聞（2015.2.2b）「「弱者と共に」志継ぐ」西部夕刊20面。

文部科学省（2015.2.2）「海外渡航時の安全確保に関する注意喚起について（通知）」文部科学省。

平田譲二（2014）「既存研究からみた異文化適応能力」『産業能率大学紀要』第34巻第２号　pp. 39-55。

藤田哲也（2012）「国際教育・交流への事務組織としての役割」『南山大学国際教育センター紀要』第13号　pp. 63-70。

細谷美代子・岡田昌章・三好茂樹・大塚和彦・荒木勉・須藤正彦・P. M. エドモント（2003）「2003年日中国際交流プログラム活動報告」『筑波技術短期大学テクノレポート』第10巻第２号　pp. 135-141。

参考 Website

外務省トルコにおける日本年：http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/turkey/2010/

関西学院大学国際教育・協力センター日加大学協働・世界市民リーダーズ育成プログラム Cross-Cultural College：http://ccc-canada.jp/index.html

関西学院大学実践型“世界市民”育成プログラム：
http://kgglobal.kwansei.ac.jp/purpose/purpose_m_000655.html

日本学術振興会スーパーグローバル大学等事業スーパーグローバル大学創成支援：
http://www.jsps.go.jp/j-sgu/